

ミュージカル *Cats* はなぜわかりにくいのか？

光 富 省 吾*

序

Andrew Lloyd Webber 作曲のミュージカル *Cats* (West End 1981 年初演、Broadway 1982 年初演) は、*The Phantom of the Opera* (West End 1986 年初演、Broadway 1988 年初演)、*The Lion King* (Broadway 1997 年初演、West End 1999 年初演)、*Les Misérables* (West End 1985 年初演、Broadway 1987 年初演)、*Elizabeth* (邦題『エリザベート』、Vienna 1992 年初演、宝塚 1996 年初演) などと並んで日本国内だけでなく世界中で最も人気のあるミュージカル作品のひとつである。*Cats* は、魂が浄化されるという、一種の宗教的体験を観客にもたらすミュージカルであり、ただ歌って踊って、ハッピーエンドを迎える作品が多いミュージカルの中では最高傑作の一つに挙げられるであろう¹。東宝、宝塚歌劇団、劇団四季などで音楽監督・指揮者を務める塩田明弘は、『知識ゼロからのミュージカル入門』でこの作品を分類上「休日は家族で劇場へ：子どもも楽しめるほのぼのミュージカル」(塩田 107) として紹介している。しかしながら *Cats* は「子どもも楽しめる」程度に人気がある一方で、実はわかりにくいミュージカルでもある。個人的経験であるが、2009 年のある日、私のオフィスを訪ねて来た劇団四季社員田中明子と雑談中に、田中が「『キャッツ』のテーマってわかりにくくありませんか？」と質問してきた。「他の(劇団四

* 福岡大学人文学部教授

季の) スタッフと話をしている、いろんな猫が登場して楽しいけれど、テーマはよくわからないという感想を聞きます」と語っている。私の授業における学生たちの反応もほぼ同様であった。実際ステージでは Grizabella がヘヴィサイドレイヤーに昇り、最後にステージに残った猫たちが賛美歌のような合唱をして、宗教的荘厳さを残しながら終演する。劇自体を振り返ってみると、様々な猫がステージに登場し、歌ったりダンスをしたりしながら、飛び跳ねるのであるが、観劇後の客にとって、はたしてこのミュージカルがどんなストーリーだったのかはわからない場合が多い。劇場のプログラムに記されている曲名にある様々な猫たちが次々にステージに登場して、自分の人生(猫生というべきか)を語るが、それ以外の脇役の猫も多く登場する。そして実際に歌ったり踊ったりしている時間が長いのはむしろこのような脇役たちである。そして一つ一つのエピソードが相互に関連していない場合が多いせいで、ストーリーが見えにくくなっている。Cats がわからないと言っているのは決して田中や劇団四季の社員だけでなく、多くの人が同様な疑問を抱いていることは、以下の池田雅之の引用にも明らかである。

ミュージカル『キャッツ』はとても楽しいけれど、ドラマの筋がわからないという声や、音楽と踊りはとても素晴らしいけれど、物語としてはあいまいね、という声を、私は耳にしていました。この感想は、一九八六年、このミュージカルをロンドンで最初に見た時の私の実感でもありました。

(池田 13)

このように池田に限らず、多くの人が Cats は観ていてとても楽しいけれど、実はよくわからないという感想を抱いていることは明らかである。そして拙稿の目的は多くのミュージカル・ファンのために Cats のわかりにくさを少しでも解明することである。ただし、あくまでもわかりにくさを解明することであり、

多くの *Cats* ファンがこれを契機として、すべてわかるようになることを保証するものではないことは最初にお断りしておく。

1 章： *Cats* と *Old Possum's Book of Practical Cats*

T. S. Eliot は 1939 年 10 月 5 日に詩集 *Old Possum's Book of Practical Cats* を出版している。1972 年² イギリスの作曲家 Andrew Lloyd Webber は、偶然この詩集をロンドンのヒースロー空港で購入し、アメリカへ向かう飛行機の中で読みながら、小さい頃母親が膝枕をしてくれながらこの本を読んでいたことを思い出す。そして子供のために詩に音楽をつけるというアイデアを思いついたという（宮城 12、小山内 6 劇団四季 13）³。しかしながらそのまま詩に曲をつけても物語性のあるミュージカルにならないことはわかっていた Lloyd Webber は次のように語っている。

『キャッツ』にはストーリーもないし、ただ詩集に曲をつけただけではないか……というかたが時々いらっしゃいますが、実際にはそう簡単に出来上がったわけではありません（笑）。詩集の中身と『キャッツ』を見比べていただければ、詩の順番と舞台の曲順は全く異なっていることや、「メモリー」のように、詩集には存在しないナンバーがあることにお気付きになるでしょう。詩集には一環（原文のまま）したストーリーが存在しなかったので、ミュージカルに立ち上げるには、一つの流れを構築していかなければならなかったのです。ストーリーは私には不可欠です。ドラマチックなシチュエーションがあつてこそ、よい曲が書けるのです。（劇団四季 13）

エリオットの原作は 15 編の詩からなるが、Lloyd Webber はそのうち “Cat Morgan Introduces Himself” 以外の 14 編を採用し、再構成している。猫をテーマとしていることを除いては、もともとお互いに関連性のない独立した詩の集

合体であるため、ストーリー性を持たせるために、作品の順序を並べ替えることはそれほど困難なことではない。さらに、エリオット未亡人から渡された未発表の作品のうち、「哀しすぎる」とい理由で詩集に入らなかった“Grizabella: The Glamour Cat”を入れて、栄誉ある猫に選ばれるというストーリーが完成する（小山内 7）⁴。

また“The Moments of Happiness”も、*Old Possum's Book of Practical Cats*ではなく、*Four Quartets*（1943 年）からの引用となっている（池田 121－22）。詳細は後で述べることになるが、“The Moments of Happiness”は*Cats*というミュージカルの完成には欠かせない重要な位置を占めている。このように*Old Possum's Book of Practical Cats*からの 14 編と“Grizabella: The Glamour Cat”と“The Moments of Happiness”によって、*Cats*は構成されている。しかしながら、プロダクションによっては、14 編すべてが使用されるわけではないのである。たとえばロンドン版 DVD では、どういうわけか“Growltiger's Last Stand”はカットされている⁵。劇団四季版では逆に“The Awful Battle of The Pekes and the Pollicies”が省略されている。さらに登場する猫もプロダクションによって異なる。例えば、Sillabub はロンドン版には登場しないし、逆に Jemima はブロードウェイ版には登場しない。この場合、Sillabub と Jemima は同じ役を果たしている。劇団四季版には Sillabub と Jemima のどちらも登場するが、役割は異なり、Grizabella と“Memory”を歌うのは Sillabub である。

2 章：Cats が分かりにくい理由

これまで劇場と DVD で観て来た上で感じた *Cats* が分かりにくい理由をここで整理しておく。

（１）ノンセンス性と翻訳

Eliot の代表作 *The Waste Land*（1922 年）は「現代の荒廃した時代、伝統と宗教を喪失した社会、退廃して地獄へ堕ちた人間を、一つの荒地という風土に詩的形象化して描いた」（鍵谷 217）というように、Eliot の詩には深刻な哲学的意味の追求が存在する一方で、*Old Possum's Book of Practical Cats* は一種の戯れ歌あるいは言葉遊びの詩であり、Peter Ackroyd は、この作品を「ナンセンス詩」（アクロイド 289）と認め、イギリスの Edward Lear の系譜に位置づけている⁶。Elizabeth Sewell は Eliot を同じくイギリスの Lewis Carroll のようなノンセンス詩人の系譜に位置づけている（Sewell 66-68）。Eliot の原作詩がもつノンセンス性は、「人間の思考や実存につきまとう一種の重苦しさ、息苦しさを一瞬のうちに無化してしまう力」（池田 33）をもっているし、「ノンセンスとは、人間に抜きがたくまわりついている『意味追求の病い』や『合理性への偏執』などを笑い飛ばす生命力をもっている」（池田 33）と言えるであろう。

しかし日本で *Cats* を観る場合、どうしても翻訳バージョンになる。翻訳とはある国のことばで書かれた文章の「意味」を別の言語に置き換えるものである。しかし、そもそも英語で書かれ、「意味」づけを拒否したノンセンス詩を完璧に日本語に置き換えるのは困難であり、英語の原詩の持つおかしさを日本語で伝えるのは最初から無理である。また脚韻や駄洒落などのことば遊びもそのまま翻訳できないのは明白である。

（２）視覚と聴覚に訴えるステージ

観客席とステージの境界線が曖昧であること。開演直後は猫の黄色い目が劇場の至る所で光り、客席間の通路に猫が走るし、見る側/演じる側の区別が曖昧となる。例えば劇場で鑑賞する度に感じたことであるが、“Skimbleshanks : The Railway Cat” ではダンスと音楽に合わせ、観客も手拍子でステージに参

加する。劇場全体が一体化して音楽とダンスと照明を含めた劇場装置の中でめくるめくステージが熱狂と興奮のうちに展開されるため、観客は観ている間は至福の時間を過ごすことができる。しかし、興奮が冷めた後、このミュージカルのテーマは何だったのかと改めて問い直す時、答えが見つからないのが実情である。

（３）フラグメンタリズム

Lloyd Webber が述べているように、*Old Possum's Book of Practical Cats* にはストーリーは存在しない。それを Lloyd Webber は組み立て直したことも一因であるが、元々バラバラであったものを首尾一貫したストーリーにすることに無理があった。*Cats* のテーマやストーリーを主張する池田でも、矛盾しているようであるが、統一性の欠如は次のように認めている。

ミュージカル『キャッツ』には、断篇主義的な感じがまぬがれません。したがって、ストーリー性とテーマ性があり感じられず、あったとしても、それが何か取って付けたような感じがしてしまうのはやむをえないのかもしれない。

（池田 23）

Cats が断片の積み重ねであるという意味で、このミュージカルには *A Chorus Line*（1975 年）の影響が見られる。このミュージカルを作った Michael Bennett は、無名のダンサーたちに自分の人生を語らせて、それを録音したテープを再構成して、作品を作った。ベトナム戦争の事実上の敗戦とウォーターゲート事件とニクソンの辞職で、暗く沈んでいたアメリカ社会を背景にして、スポットライトを浴びることがない、無名のバックダンサーの無垢で輝いた青春群像を（汚れた政界と対比的に）描き出した。個々のダンサーのエピソードに

はお互いに関連性がなく、語って行く順番自体にも意味がなく、順番が入れ替わってもおかしくはない。*Cats* も同様に断片の積み重ねである。“The Rum Tum Tugger”と“Mungojerrie and Rumpleteazer”の順番が入れ替わっていても別におかしくはない。そのような意味で、*Cats* は *A Chorus Line* という過去のミュージカルの名作の伝統を引き継いでいる⁷。

（４）イギリスの階級社会

このミュージカルにはイギリスの地名やホテルの名前などが登場する。イギリスの社会事情に精通した人でなければ、きちんとイメージできないであろう。Grizabella が天に昇るときに出てくる The Russell Hotel もロンドン中心部にある由緒あるホテル（歌詞の内容から、たぶん建築された当初は少なくとも高層ビルだったと思われる）であることはある程度想像できるが、具体的にはよくわからない。

またイギリスには、階級制度がある。池田によると *Cats* に登場する猫には社会性が反映されているという。たとえば、Jennyanydots は、「下層中産階級」、Rum Tum Tugger は「ワーキングクラス・ヒーロー」、Skimbleshanks は、「ワーキングクラス」Bustopher Jones は「成り上がりの一代貴族」（池田 74-75）という風に。イギリス人はともかくとして、イギリスの階級社会に疎い日本人にはやはりわかりにくい。

（５）猫の名前

Cats の元になった Eliot の詩は、ノンセンス詩といいながら、猫の名前には意味を持たせることば遊びになっている。これも日本人にはわかりにくい。Growltiger は、growl「うなる」と tiger「虎」をあわせたもので、まだわかりやすいほうである。Rumpus Cat も rumpus「大騒ぎ」でひじょうにわかりやすい。泥棒猫の片割れ Rumpleteazer は、rumple「しわ、ひだ」と teaser「弱

い者いじめをする人」(池田 102) で、日本人でも英語がわかれば、理解しやすいが、池田によると、グリム童話の小人 Rumpelstiltskin をもじった Eliot の造語(池田 102) という解釈もある。Mistoffelees も Goethe の *Faust* (1808 年) における悪魔メフィストフェレス Mephistopheles のもじり(池田 153) であるという。凶事の予言者を意味する Cassandra は、ギリシャ神話などの西欧古典文学の知識も要求されるため、そのような知識のない人にはわかりにくい。

(6) ポッサムという視点

原作の *Old Possum's Book of Practical Cats* は、Old Possum が語るという設定になっているが、*Cats* では複数のジェリクル・キャッツが語るという形になり、語りの視点が変わる。しかも Old Possum は作者 Eliot の分身とも言われており、詩集を読む時は語りの背後に Harvard 大学と Oxford 大学出身者という知的エリートが存在することを常に意識してしまう。大学で英米文学を専攻した経験がある観客にとっては、T.S. Eliot が *Cats* の原作者であることがわかると、どうしても *The Waste Land* (1922 年) のような難解で学術的な詩(古典文学の引用、パロディと様々なイメージリーのコラージュ)の作者あるいは“Tradition and the Individual Talent”のような評論に代表される、伝統を重視する保守主義者を意識してしまう。そして *The Waste Land* または“Tradition and the Individual Talent”と *Cats* を結ぶものは何であるかを考えてみると、関連性は見られず、ほとんどの観客は困惑するものである。

(7) 「わかりにくさ」が魅力

以上述べて来たような「わかりにくさ」が逆に魅力であると認める人もいる。例えば池田雅之である。

それにしても、ミュージカル『キャッツ』を見終わった観客には、どこか消

化不良と欲求不満が残るようです。それで、もう一度、もう一回と、徐々にリピーターの仲間入りをしていく『キャッツ』ファンも少なからずいるようです。

観客の側から見て、この祝祭的な『キャッツ』の、芝居としてもっている「あいまいさ」「わけのわからなさ」が原因のようですが、一方では、この表層的な一種の「あいまいさ」と「わけのわからなさ」が、『キャッツ』の魅力であることも確かなのです。（池田 18－19）

ミュージカルは大衆エンタテインメントであり、見る人の好みが作品の評価に反映されるのはやむをえないが、私はわからないから *Cats* が好きであるという立場は取らない。

（８）Grizabella が選ばれる理由

Cats がわからなくなる理由として最大のものが Grizabella が一年に一度天へ昇る猫に選ばれる理由である。

様々な猫が登場し、夜明けまで歌って踊る一夜を描いて、一見すると統一性のないように思われる *Cats* であるが、“The Naming of Cats”において、この夜のダンス・パーティの進行役 Munkustrap がこの夜の祝祭の目的を次のように宣言する。

Jellicle cats meet once a year
At the Jellicle ball where we will rejoice
And the Jellicle leader will soon appear
And make what is known as the Jellicle choice
That's when old Deouteronomy just before dawn
Through a silence you feel you can cut with a knife

Announces the cat who can now be reborn
And come back to different Jellicle life
For waiting up there is the Heavyside layer
Full of wonders one Jellicle only will see
Jellicle ask because Jellicle dare
Who will it be? Who will it be?

引用した部分はエリオットの原作の “The Naming of Cats” にはないので、Lloyd Webber の創作と考えられる。*Cats* の原作は *Old Possum's Book of Practical Cats* であるが、ストーリー性を持たせるには原作のままでは不可能であり、“The Moments of Happiness” のように *Four Quartets* という別の作品から引用したり、“Grizabella: The Glamour Cat” のように没になった原稿（未公開作品）から挿入したり、新たに歌詞を追加したりしなければならないという事情がある。

開会宣言に話を戻すと、この Munkustrap のことばにこのミュージカルの主題が提示されていると池田は次のように述べる。

ここにはっきりと『キャッツ』全体の隠された主題が、マンカストラップというジェリクルたちの若者頭の口から発せられます。つまり、ミュージカル『キャッツ』という物語は、ジェリクル・リーダーのオールド・デュトロノミーによって、生まれ変わり、再生の命を授けられる一匹の猫の選択に至るまでの、ジェリクルたちの誕生と救済と再生のドラマであることが、一点の曇りなく提示・予告されることになるのです。（池田 71-72）

池田が述べたようなストーリーにするために、Lloyd Webber は Old Deuteronomy のキャラクターを変更する必要があったと考えられる。というのも、

原作の Deuteronomy はのんびりとひなたぼっこしているような老猫で、「ジェリクル・リーダー」として、猫たちを統率するといったリーダーシップを発揮するようなタイプとしては描かれていない⁸。そして、Lloyd Webber によって、Old Deuteronomy は、ロンドンで人間に飼いならされることを嫌い、人生を楽しむ個性豊かな猫の集団を統率する、「猫たちの共同体の長の役割を担わされ、ジェリクル全体の幸せを求めて、『本当の幸せとは何か？』と、みんなに諭すことのできる人格者猫なのです。」（池田 39）と池田が述べるようなリーダーにキャラクターが変更されている。

そして Deuteronomy によって最終的に選ばれるのが Grizabella である。このミュージカルは Grizabella が永遠の生命を持つ猫に選ばれるプロセスを描いている。しかし、（前にも述べたが）多くの観客が疑問に思う、あるいは尋ねられてもすぐには答えられないことが Grizabella が選ばれて、天に昇って行く理由である。

3 章：Grizabella が選ばれる理由（1）

何度も繰り返しているが、この作品の最大の謎は、Grizabella がヘヴィサイドレイヤーへ登って、永遠の生命を与えられる猫に選ばれることである。以下で Grizabella 選ばれる理由を検討してみる。

小山内伸は、Lloyd Webber の主要作品、*Evita*（1978 年）、*Cats*, *The Phantom of the Opera*（1986 年）の共通点として、いずれも「上昇物語」（小山内 8）であることを指摘した上で *Cats* の場合は、「通常のシンデレラ・ストーリーのように美貌や才能や覇気を兼ね備えた女性が出世するわけではなく、薄汚い娼婦猫（最も貧しい存在）が最高位を獲得するのだから、それを納得させるだけの過程の工夫が不可欠である。そこに説得力がないと、突然の上昇は予定調和にしかみえない。」（小山内 9）と述べて、Eliot の原作とミュージカルの登場猫の順番の違いに着目する。そして、以下のような曲のバターの配列が効果的

であるとしている。

- A 枯れた味わいのある短調曲
- B 軽快で明るい長調曲
- C ミステリアスの猫の曲 (小山内 10)

これを具体的に *Cats* の曲に当てはめると以下ようになる。

第一幕

- A 「張りつき猫/オールド・ガンビー・キャット」(ホ短調→ハ短調)
- B 「あまのじゃく猫/ラム・タム・タガー」(イ長調)
- ♪ 「ダンディ猫/バストファー・ジョーンズ」(ホ長調)
- C 「泥棒猫/マンゴジェリーとランペルティエザー」(ニ短調→変ホ短調)
- ♪ 「長寿猫/デュトロノミー」(ト長調)

第二幕

- A 「役者猫/ガス」(ニ長調だが、ロ短調に近い調べ)
- B 役者猫が演じる劇中劇「親分猫/グロールタイガー」(変ニ長調→何度か転調し、変ホ長調)
- ♪ 「鉄道猫/スキンプルシャンクス」(ホ長調→ヘ長調)
- C 「犯罪猫/マキャヴィティ」(ハ短調)
- ♪ 「魔術猫/ミストフェリーズ」(ヘ長調) (小山内 10-11)

小山内は以上のパターンによって、*Grizabella* の主題歌「メモリー」へ至るプロセスを説明し、次のように続けている。

この曲順、すなわち A 「静」→B 「動」→C 「ミステリー (異界への導入)」と

いう一連のムーブメントは、最もみすばらしい存在である娼婦猫が卑賤な地べたから輝かしい天上へと昇る過程をかたどり、音楽的に裏打ちする構造になっている（12）

地べたと老いという枯れた曲想に始まり、陽気で軽快な歌で思い切り跳ねて、ミステリアス空間を通過する——というプロセスが、最も貧しい存在の最高位への上昇を感覚的に支えているのだ。（小山内 12）

小山内の考え方は、あくまでも観客を感覚的に納得させるための基調音（＝「音楽的に裏打ちする構造」）にすぎず、Grizabella が天上に昇り、永遠の生命を与えられる猫に選ばれる説明とはなっていないために、必ずしも私の疑問に対する答とはなっていない。小山内は Grizabella の昇天を観客に納得させるために、音楽上の構成が必要だと述べているにすぎず、Grizabella が選ばれることは最初から決まっていると考えているようであり、Grizabella が選ばれる理由を特に疑問視しているようには思えない。

小山内は言及していないが、“Memory” のメロディを歌うのは Grizabella だけではない。Grizabella は “Memory” を二度歌っているが、ロンドン版 DVD で確認する限り、Jemima と他の猫も “Memory” の一部を歌っている。曲の順番から察すると小山内の “Memory” は Grizabella が二度目に歌うほうを指しているようである。

歌詞は二度目とは若干異なるが、一度目は第一幕の終わりである。“Memory” を歌う前に Grizabella は踊ろうとするが、年齢と積み重ねてきた苦悩が原因で、体が思うように動かない。そこで Grizabella は若くて美人（美猫というべきか？）だった頃の記憶を甦らせて、“Memory” を歌うのである。さらに CD では “The Moments of Happiness” の一部になっているが、Jemima が歌う部分は “Memory” と同一メロディーであり、歌詞もほぼ同一である。小山内の

主張する「一連のムーブメント」の後に Grizabella の “Memory” が歌われるとは限らないのであり、必ずしも「音楽的に裏打ちする構造」とはなっていない。

小山内の Grizabella 昇天説では多くの Cats ファンが納得できないのは明らかである。小山内説は理屈ではなく、あくまでも音楽的に感覚で理解せよと言っているようにしか見えない。理屈で（意味で）理解しようとする姿勢は、前に述べたノンセンス詩との関連でいえば、私が「意味の病い」にかかっている証拠かもしれないが、感覚的であれ、論理的であれ、納得できないものはやはり納得できないのである。

4 章：Grizabella が選ばれる理由（2） （“Memory” と “The Moments of Happiness”）

池田雅之は小山内とは異なるアングルから *Cats* の謎に迫る。池田の研究が独創的であるのは、Grizabella が歌う二つの “Memory” と “The Moments of Happiness” に着目した点である。

第一幕が終了する直前に Grizabella は踊ろうとするが、年老いているせいか（あるいは精神的苦痛のせいで）踊れない。そこで Grizabella は “Memory” を次のように歌う。

(Grizabella)

Midnight

Not a sound from the pavement

Has the moon lost her memory?

She is smiling alone

In the lamplight

The withered leaves

Collect at my feet
And the wind
Begins to moan
Every street lamp
Seems to beat
A fatalistic warning
Someone mutters
And the street lamp gutters
And soon it will be morning
Memory
All alone in the moonlight
I can smile at the old days
I was beautiful then
I remember the time I knew
What happiness was
Let the memory
Live again （下線は筆者）

歌の内容は池田によると「グリザベラが若き日の思い出にすがりつこうとする気持ち」を歌った」（池田 115）もの、あるいは「まだ美しく過ぎ去った日々を想う回想の歌」（池田 117）であり、Grizabella の意識は美しく幸福だった、若い頃＝過去にしか目は向いていない。“Memory” が「記憶」や「思い出」である以上は、内容が過去になるのは当然ではあるが。

そして Grizabella が舞台を去ろうとする時、Old Deuteronomy は救いの手を差し伸べようとするのであるが、Grizabella はそれに気がつかない。そこで第一幕は終了する。そして、第二幕の開始後、Old Deuteronomy が “The Moments

of Happiness” を次のように歌う。

The Moments of happiness
We had the experience but missed the meaning
And approach to the meaning restores the experience
In a different form beyond meaning
We can assign to happiness the past experience revived in the meaning
Is not the experience of one life only
But of many generations—not forgetting
Something that is probably quite ineffable⁹

“happiness” というタイトルにある語は Grizabella が歌う “Memory” の同語を受けているのは明白であり、“The Moments of Happiness” は Grizabella が歌う “Memory” への返歌である。池田はこの曲の意義を次のように説明する。

二幕目のはじめにデュトロノミーが歌う「幸福の姿」（原題は『幸福の瞬間』）を境に、グリザベラは徐々に生まれ変わっていきます。（池田 42-43）

「幸せの瞬間」とは、過去の意味を問いつつも、それを未来へ、さらなる世代を越えた〈永遠の瞬間〉へとつなげる時に、はじめて実現するものではないでしょうか。この『四つの四重奏』の中「ドライ・サルベージ」から採られた一節が、デュトロノミーによって歌われることによって、グリザベラの再生と永遠の命の授かりの啓示が示されたのだと思います。（池田 123）

と述べている。池田はあくまでも Grizabella の一代限りの生命（人生）の中で解釈しているように思えるが、しかし “The Moments of Happiness” をよく

読めば、一匹の猫が経験した幸福は、その猫だけでなく、次の世代以降にも継承していくものであるという意味である。

ここで二つの“Memory”の歌詞の内容を確認しておく必要があるだろう。これは第二幕に入ってから“Memory”である。Old Deuteronomy が“The Moments of Happiness”を歌った後に、Jemima が歌う。

“Memory” (Jemima)

Moonlight turn your face to the moonlight

Let your memory lead you

Open up, enter in

If you find there the meaning of what happiness is

Then a new life will begin

Jemima が歌った後、ステージの全員がリピートする。

“Memory” (全員)

Moonlight turn your face to the moonlight

Let your memory lead you

Open up, enter in

If you find there the meaning of what happiness is

Then a new life will begin

ここでステージ上の全員が聖なる世界への覚醒、宗教的体験をしていることは、全員が立ち上がって、天空（たぶん月）を見上げることからわかる。ここはこのミュージカルで観客の感情が最も高ぶる場面の一つである。（もう一つは地面に伏していた Grizabella が立ち上がりながら、“Touch me/ It’s so easy to

leave me” (“Memory” の歌詞の一部) と歌う場面である。) ここで、Jemima を始めとしてステージ上の猫が “The Moments of Happiness” に込められた Old Deuteronomy のメッセージに応じて、未来への希望を歌っているのである。Cats を鑑賞する場合、この場面を無視することはできない。

それから劇場猫 Gus (Asparagus)、鉄道猫 Skimbleshanks、犯罪猫 (あるいは不思議猫) Macavity が登場する。Macavity が Old Deuteronomy を誘拐したため、Mistoffelees がマジックを使って、Old Deuteronomy を救出した後、再び Jemima がステージ後方の高いところから “Memory” を歌う。

Daylight see the dew on a sunflower

And a rose that is fading

Roses wither away

Like the sunflower

I yearn to turn my face to the dawn

I am waiting for the day

ここで Munkustrap がいいよいよ選ばれた猫を発表する。それから Grizabella が登場し、“Memory” を歌う。

Memory turn your face to the moonlight

Let your memory lead you

Open up, enter in

If you find there the meaning of what happiness is

Then a new life will begin

Memory all alone in the moonlight

I can smile at the old days

I was beautiful then

I remember the time I knew what happiness was

Let the memory live again

Burnt out ends of smokey days the stale cold smell of morning

A street lamp dies another night is over another day is dawning

Daylight I must wait for the sunrise

I must think of the new life

And I mustn't give in

When the dawn comes tonight will be a memory, too

And the new day will begin

ここまで歌うと Grizabella は、地面に伏してしまう。それを見た Jemima が再びステージ上段から次のように歌う。

Sunlight through the trees in summer

Endless masquerading

それを聴いた Grizabella が歌唱に加わる。

(Grizabella と Jemima)

Like a flower as the dawn is breaking

(Grizabella 単独)

The memory is fading

Grizabella は立ち上がり、歌う。

Touch me

It's so easy to leave me

All alone with the memory

Of my days in the sun

If you touch me you'll understand what happiness is

Look a new day has begun¹⁰

そして池田は

グリザベラが最後に歌う「メモリー」は、過去（メモリー）をもう振りかえることをせず、明日を生きて行こうとする決意の歌です。これは一幕目の「美しく去った過ぎし日を想う」回想のメモリーではなく、この世を思い出に渡して、明日に向う希望の歌、グリザベラの再生の歌ではないでしょうか。（池田 42－43）

と述べている。池田が指摘するように、確かに最初の“Memory”と二幕で歌われる同曲の歌詞は異なり、二度目のほうが Grizabella の意識が未来へと開かれている。

池田の本は、*Cats* という一つのミュージカルにしぼってあり、しかも一人の著者による労作である。これまでは一つのミュージカル作品に限定していても、多数の著者によるアンソロジーが多かった。*Cats* を観た後で、感動しつつも、何かもやもやとしていたが、この本を読むと、そのような気分が晴れ、

このミュージカルに対する理解が深まったのは確かである。しかしよく読めば、Grizabellaの救済というこのミュージカルの最も重要なテーマであり、最大の謎が必ずしも解明されるわけではないのだ。

たしかに池田が指摘するように、Grizabellaは“The Moments of Happiness”を境に生まれ変わるのである（43）。しかしながら、今見て来たように“The Moments of Happiness”を境に「明日に向かう希望の歌」（池田 43）を歌うのはJemima（と他の猫たち）のほうが先であり、むしろGrizabellaはJemimaらに触発されて、生まれ変わるのである。もし“The Moments of Happiness”によって、新しい境地を見出した猫が選考の基準であるとすれば、Grizabellaより先に“Memory”を歌い、最後はGrizabellaを導いていくJemimaこそ天上に昇って行く資格が与えられるのではないだろうか？

池田は「エリオットが詩人としてもともと持っていた資質は宗教性（贖いと救い）と悲劇性（悔恨と失意）でした」（44）と述べて、さらにAndrew Lloyd WebberとTrevor NunnがEliotの意志を引き継いだとしている。たしかにLloyd WebberとNunnは、原作の*Old Possum's Book of Practical Cats*にはない魂の救済というテーマを持ち込み、このミュージカルを作っている。Eliotの作品、例えば*The Wasteland*に「死と再生」のテーマが流れているのは英米文学史の教科書にも書かれているはずであるし、Lloyd Webberがこのミュージカルにこのテーマを持ち込んだと考えられる。しかし完成した作品のみで解釈する限り、救済される猫がGrizabellaに限定される必然性はどこにも見当たらないのである。

Lloyd Webberは苦しみを背負ったGrizabellaに救済をもたらすことを中心にこの作品を制作したと思われる。これは間違いないであろう。しかし理由づけは弱いと言える。

Grizabellaが選ばれる根拠として、池田はGrizabellaが娼婦であることに着目する。本来「性の営みは、男女の快樂をとおして、根源的な魂の癒しと肉体

の解放をもたらすはずのもの」(池田 90) であるが、売春は「人間の魂を傷つけ、時には滅ぼすもの」(池田 90) と述べ、娼婦は「他者と自己の魂を癒やし、肉体を再生させる」(91) 一面を持ちながらも、「どんな国や社会からも法的にも世間的にも容認されることはなかった」(91)、いいかえれば「〈聖なるもの〉と〈卑俗なるもの〉の二重性を抱えた」(91) 存在であり、これは他の猫にもあてはまると述べている。そして「グリザベラの救済と再生は、ジェリクルたちの、そして私たち人間の救済と再生の物語にほかならない」(92) と述べている。

たしかに売春婦であるという理由で罵倒されたり、白眼視されたりしながら、苦悩を抱える Grizabella が選ばれれば、Eliot らしい「死と再生」のテーマに合致する。観客にとっても過去に罪を犯した猫が救済され、その魂が再生される方が救済の度合いが上昇する分だけわかりやすい。しかしこれではまるで Grizabella が娼婦であったから、救済されるようにしか思えない。逆に考えると Jemima (や Sillabub) が選ばれないのは、純粹・無垢だからなのか？ 選ばれるには汚れていないといけないのか？ ステージにいる猫たち全員を聖なる世界に導くように、歌うのは Jemima ではないか？ 前に述べたように、Jemima が舞台後方の高い場所から

Moonlight turn your face to the moonlight

Let your memory lead you

Open up, enter in

If you find there the meaning of what happiness is

Then a new life will begin (下線部 筆者)

と“Memory”の一部を歌い、その後に全員が同一の歌詞を合わせて歌いだすとき、魂が浄化されるような気分になるのは決して私だけではないはずだ。

以上述べて来たように、多くの猫の中で Grizabella が救済される理由は十分なのである。池田もその点は自覚しているようで、「魂の浄化を体験するのは、グリザベラだけではなく。ジェリクルたち全員も、グリザベラと同様の体験をしたのです」（池田 158）と述べて、全員が救済されると予防線を張っている。しかし全員の魂が救済される中でなぜ Grizabella なのかという疑問には必ずしも答えられていない。最初から Grizabella が救済されるという前提が先にあるとしか思えない。言い換えれば、Grizabella が天に昇るのは、先述した小山内の、最初から設定された「予定調和」（小山内 9）でしかないという主張を肯定せざるをえないのである。

結 論

Cats は人気のあるミュージカルであるが、以上見て来たように、必ずしもわかり易いわけではない。お互いに関連性が薄い断片的なエピソードの集合体であるため、個々の部分は楽しめても全体像がつかみにくい。年に一度の祝祭で天上に昇り、永遠の生命が与えられる猫が選ばれるというテーマは存在するのであるが、必ずしもテーマとは関連していないエピソードが断片的に挿入されているために、テーマ自体が見えにくくなっている。そして最後に Grizabella が選ばれて、天に昇って行くのであるが、その理由が極めて曖昧である。

小山内伸は Grizabella が選ばれることを納得させるために Lloyd Webber の曲の構成に着目した。しかし、Grizabella が選ばれる根本的な理由を追究しているわけではない。

池田雅之は Eliot の死と再生のパターンに着目し、売春婦として性の問題点を抱えて苦悩する Grizabella がヘヴィサイドレイヤーを上昇する理由を論証しようとしているが、必ずしも説得力があるとはいえず、Jemima や他の猫が選ばれたとしても決して理不尽ではない。

Grizabella が天に昇る猫に選ばれたから、他の猫も同時に救済されるのでは

ない。他の猫も、Grizabellaと同じように聖なる体験をしているのであり、天の祝福を受ける資格はある。

わかりにくいミュージカルであることには変わりがないが、ますます聖なるものが失われて行く 20 世紀末から 21 世紀前半においては、聖なる体験を観客にもたらすという意味で *Cats* の価値は不変である。

注

¹ ミュージカルは大衆娯楽でもあり、エンターテインメントとして捉えれば、ハッピーエンドも観客にとっては一種の清涼剤であり、その意義を否定するつもりはない。ただし、文学的に見れば、*Cats* の作品価値は多くのミュージカルをはるかに凌駕している。

² Lloyd Webber は 1971 年ブロードウェイで *Jesus Christ Superstar* を上演し、続く 1972 年にロンドンで同作品を上演しており、この頃は新進気鋭のミュージカル作家としての道を歩みだした時期である。

³ 実際に詩に曲をつけ始めたのは 1977 年後半である。(宮城 12)

⁴ 池田によると、“Grizabella: The Glamour Cat” の前半部分は “Rhapsody on a Windy Night” からであり、後半部分は Eliot 原作の未完の “Grizabella” からの引用ではないかという。(池田 85-86) 確かにミュージカルの前半部分は次のようになっている。

Remark the cat

Who hesitates toward you in the light of the dawn

Which opens on her like a grin

You see the border of her coat

Is torn and stained with sand

And you see the corner of her eye

Twist like a crooked pin

一方 Eliot の原作は次の通りである。

‘Regard that woman

Who hesitates toward you in the light of the door

Which opens on her like a grin

You see the border of her dress

Is torn and stained with sand,

And you see the corner of her eye

Twists like a crooked pin’ (*Collected Poems* 26)

相違点は下線部で示している。小さな変更は行われているが、ほぼ原文のままであることは明らかである。パリの場末の裏通りに立つ娼婦のイメージをほぼそのまま借用している。

⁵ “Growltiger’s Last Stand” はロンドン版に基づく CD には入っている。私が観た 1995 年 9 月のニューヨークの Winter Garden 劇場においても、JR 五反田駅近くの劇団四季 *Cats* 劇場（当時）においても、入っていた。

⁶ “George Williamson も “‘Five-Finger Exercises’ (1933) reveal a light side which is seen more fully in the *Old Possum’s Book of Practical Cats* (1939); these wise and witty fables also provide the verbal and metrical delight of the best nonsense verse of Edward Lear” (Williamson 201) と述べて、この作品 “Five-Finger Exercises” に Edward Lear 的のンセンスな要素を認めている。

⁷ 過去のミュージカルを踏まえているという意味では、“The Awful Battle of The Pekes and the Pollicies” において、ダンスしながら戦うシーンは *West Side Story* (1957 年) の影響を受けていると考えられる。

⁸ 参考のため Eliot の原作の “Old Deuteronomy” を引用しておく。

Old Deuteronomy’s lived a long time;

He’s a Cat who has lived many lives in succession.

He was famous in proverb and famous in rhyme

A long while before Queen Victoria’s accession.

Old Deuteronomy’s buried nine wives

And more—I am tempted to say, ninety-nine;

And his numerous progeny prospers and thrives

And the village is proud of him in his decline.

At the sight of that placid and bland physiognomy,

When he sits in the sun on the vicarage wall,

The Oldest Inhabitant croaks: 'Well, of all . . .

Things. . . Can it be . . . really! . . . No!. . . Yes!. . .

Ho! hi!

Oh, my eye!

My sight may be failing, but I yet confess

I believe it is Old Deuteronomy!

Old Deuteronomy sits in the street,

He sits in the High Street on market day;

The bullocks may bellow, the sheep they may bleat,

But the dogs and the herdsmen will turn them away.

The cars and the lorries run over the kerb,

And the villagers put up a notice: ROAD CLOSED--

So that nothing untoward may chance to disturb

Deuteronomy's rest when he feels so disposed

Or when he's engaged in domestic economy:

And the Oldest Inhabitant croaks: 'Well, of all . . .

Things. . . Can it be . . . really! . . . No!. . . Yes!. . .

Ho! hi!

Oh, my eye!

I'm deaf of an ear now, but yet I can guess

That the cause of the trouble is Old Deuteronomy!

Old Deuteronomy lies on the floor

Of the Fox and French Horn for his afternoon sleep;

And when the men say: 'There's just time for one more,'

Then the landlady from her back parlour will peep
 And say: ‘New then, out you go, by the back door,
 For Old Deuteronomy mustn’t be woken—

I’ll have the police if there’s any uproar”—

And out they all shuffle, without a word spoken.
 The digestive repose of that feline’s gastronomy
 Must never be broken, whatever befall:

And the Oldest Inhabitant croaks: ‘Well, of all . . .

Things. . . Can it be . . . really! . . . No!. . . Yes!. . .

Ho! hi!

Oh, my eye!

My legs may be tottery, I must go slow

And be careful of Old Deuteronomy!’ (*Old Possum’s Book of Practical Cats* 25–26)

以上のように Eliot の原作ではあくまでも猫のコミュニティで大切にされる老猫にすぎず、賢者であるとか仲間を統率してリーダーシップを発揮するようなタイプではない。

⁹ “The Moments of Happiness” は Eliot の *Four Quartets* の “The Dry Salvages: Part II” からの引用に基づいている。下線部がミュージカルに使用された部分である。省略がある以外はほぼ原文のままである。

The moments of happiness—not the sense of well-being,
 Fruition, fulfilment, security or affection,
 Or even a very good dinner, but the sudden illumination—
We had the experience but missed the meaning,
And approach to the meaning restores the experience
In a different form, beyond any meaning
We can assign to happiness. I have said before
That the past experience revived in the meaning

Is not the experience of one life only
But of many generations—not forgetting
Something that is probably quite ineffable :
(*Collected Poems* 208)

¹⁰ 本稿の目的はあくまでも *Cats* のわかりにくさを解明することである。Eliot の原作との比較は本来の目的ではない。しかし Lloyd Webber が Eliot の詩を巧みに利用しながら、ミュージカルを作り上げていることは確かである。その創作のプロセスを確認しておくことも無駄ではないだろう。“Memory” は Eliot の “Rhapsody on a Windy Night” に基づいているのであるが、全体的な印象は大きく異なる。Eliot の “Rhapsody on a Windy Night” を全文引用する。

Twelve o'clock.
Along the reaches of the street
Held in a lunar synthesis,
Whispering lunar incantations
Dissolve the floors of memory
And all its clear relations
Its divisions and precisions,
Every street-lamp that I pass
Beats like a fatalistic drum,
And through the spaces of the dark
Midnight shakes the memory
As a madman shakes a dead geranium.

Half-past one,
The street-lamp sputtered,
The street-lamp muttered,
The street-lamp said, “Regard that woman
Who hesitates toward you in the light of the door

Which opens on her like a grin.
You see the border of her dress
Is torn and stained with sand,
And you see the corner of her eye
Twists like a crooked pin.'

The memory throws up high and dry
A crowd of twisted things;
A twisted branch upon the beach
Eaten smooth, and polished
As if the world gave up
The secret of its skeleton,
Stiff and white.
A broken spring in a factory yard,
Rust that clings to the form that the strength has left
Hard and curled and ready to snap.

Half-past two,
The street-lamp said,
'Remark the cat which flattens itself in the gutter,
Slips out its tongue
And devours a morsel of rancid butter.'
So the hand of the child, automatic,
Slipped out and pocketed a toy that was running along the quay.
I could see nothing behind that child's eye.
I have seen eyes in the street
Trying to peer through lighted shutters,
And a crab one afternoon in a pool,
An old crab with barnacles on his back,
Gripped the end of a stick which I held him.

Half-past three,
The lamp sputtered,
The lamp muttered in the dark.
The lamp hummed:
‘Regard the moon,
La lune ne garde aucune rancune,
She winks a feeble eye,
She smiles into corners.
She smooths the hair of the grass.
The moon has lost her memory.
A washed-out smallpox cracks her face,
Her hand twists a paper rose,
That smells of dust and old Cologne,
She is alone
With all the old nocturnal smells
That cross and cross across her brain.’
The reminiscence comes
Of sunless dry geraniums
And dust in crevices,
Smells of chestnuts in the streets,
And female smells in shuttered rooms,
And cigarettes in corridors
And cocktail smells in bars.

The lamp said,
‘Four o’clock,
Here is the number on the door.
Memory!
You have the key,
The little lamp spreads a ring on the stair,

Mount.

The bed is open; the tooth-brush hangs on the wall,

Put your shoes at the door, sleep, prepare for life.'

The last twist of the knife. (*Collected Poems* 26-28)

Eliot は都市（おそらくパリであろう）の恠しい夜の路地裏の情景を一人の男の目を通して描き出した。娼婦、月、街灯、記憶などのイメージを時間ごとに、コラージュのように配置したとも言える。それは 20 世紀前半を生きる人間のグロテスクな精神風土である。Lloyd Webber と Trevor Nunn は、この詩で使用された “morning” “memory” “moon” “twist” “alone” “gutter” “mutter” “wind” “lamp” “fatalistic” などの語を巧みに織り込みながら、全く別の “Memory” というミュージカル史上に残る名曲を作り上げた。

参考文献

Clarke, Graham. *T.S. Eliot: Critical Assessments, Vol. 1-4*. London: Christopher Helm, 1990.

Eliot, T.S. *Collected Poems 1909-1962*. London: Faber and Faber Limited, 1970.

---. *Old Possum's Book of Practical Cats*. New York: Harcourt Brace & Company, 1982.

Frye, Northrop. *T.S. Eliot*. Edinburgh and London: Oliver and Boyd, 1968.

Sewell, Elizabeth. “Lewis Carroll and T.S. Eliot as Nonsense Poets” *Twentieth Century Views T.S. Eliot: A Collection of Critical Essays*. Ed. Hugh Kenner. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1962.

Williamson, George. *A Reader's Guide to T.S. Eliot: A Poem-by-Poem Analysis*. London: Thames and Hudson, 1970.

アクロイド、P. 『T.S. エリオット』 武谷紀久雄訳 みすず書房、1988.

荒木映子 『生と死のレトリック：自己を書くエリオットとイエイツ』 英宝社、1996.

池田雅之 『猫たちの舞踏会：エリオットとミュージカル「キャッツ」』 角川ソフィア文庫、2009.

- エリオット、T・S・『ふしぎ猫マキャヴィティ』北村太郎訳 大和書房、1978.
- 太田純『『ボッサムおじさん猫語り：猫とヴァースの楽しい秘密』』『モダンにしてアンチモダン』高柳俊一、佐藤 亨、野谷啓二、山口均編 研究社、2010.
- 小山内伸『進化するミュージカル』
- 鍵谷幸信『続・英語面白事典』主婦と生活社、1976.
- 劇団四季『Cats Tokyo 2006.11』（劇場販売用プログラム）劇団四季、2006.
- 塩田明弘『知識ゼロからのミュージカル入門』幻冬舎、2009.
- 二宮尊道「評価」『20世紀英米文学案内 18 エリオット』平井正穂編 研究社、1967.
- フライ、ノースロップ『T.S.エリオット』遠藤光訳 清水弘文堂、1981.
- 宮城雄二・宮城久子『ブロードウェイ・エクスプレス Vol.9 Cats』New York:Mijanjo International, Ltd., 1994.
- 『キャッツ』（DVD）ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント、2011.
- 『キャッツ：オリジナル・ロンドン・キャスト』（CD）ポリドール株式会社、1998.